

602.19-F822ウ

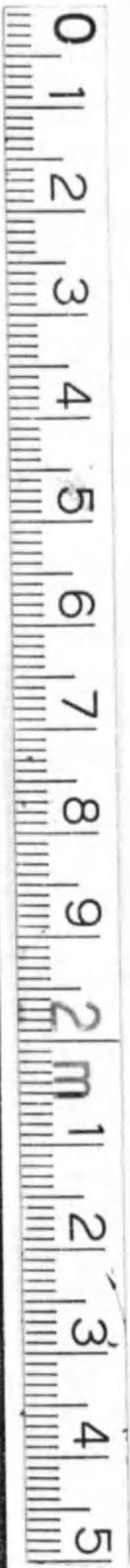


1200500747851

0219
822

博
多
港

福岡市役所編



始



967
E
337

和十九年三月

博
多
港

福
岡
市
役
所

納本

602.19
F822



博多港目次

第一編	博多港の現況と背域貿易關係會社工場	一
第一章	博多港の現況	一
第一節	博多港外國貿易	二
第二節	博多港內國貿易	七
第二章	博多港背域關係會社工場	六
第一節	福岡市及其附近	六
紡績製綿工業	九	
護謄工業	九	
鐵工諸機械工業	〇	
食料品工業	二	
麥酒工業	三	
製粉工業	三	
紙器工業	三	
博多名產工業	三	
油脂工業	四	
其他の工業	四	
第二節	久留米及其附近	五
第三節	佐賀地方	六
第四節	日田地方	七
第五節	大牟田地方	七



第六節 熊本地方	二六
第二編 福岡市内主要統制機關	二九
はしがき	二九
統制會の現狀—統制會の將來—統制會と營團	三三

一、石炭統制會福岡支部	三三
二、日本石炭株式會社福岡出張員事務所	三三
三、西九州石炭株式會社	三三
四、博多港石炭作業株式會社	三四
五、交易營團福岡支部	三五
六、日本貿易振興株式會社福岡支店	三六
七、博多港灣運送株式會社	三七
八、博多機帆船運送株式會社	三七
九、東亞紙貿易株式會社福岡出張所	三八
十、日本輸出農産物株式會社福岡出張所	三九
十一、福岡縣木材株式會社	四〇
十二、日本甘藷馬鈴薯株式會社九州事務所	四一
十三、住宅營團福岡支所	四二
十四、福岡縣食糧營團	四二
十五、鑛山統制會福岡支部	四三
十六、電氣機械統制會福岡事務所	四四
十七、産業機械統制會九州出張所	四五
十八、其の他主なる統制機關	四五

博多港

第一編 博多港の現況と背域貿易關係會社工場

第一章 博多港の現況

博多港は九州文化の中心地福岡市の海上大玄関にして、九州北部博多港の東南部一半を領有する。明治十七年朝鮮貿易港に指定、同二十二年特別輸出港、同二十八年特別輸出入港、同三十二年開港に指定せられ、東西十六軒、南北八軒八、面積約二千八百萬坪の廣大なる水面を領し、古來の要津である。

昭和二年十一月第二種重要港灣に指定せられ、昭和四年度より同十六年度迄（第一期及第二期）一千三百八十萬圓の巨費を投じて第二種重要港灣として完成、近く其の利用に向つて全能力を發揮することとなつた。更に昭和十七年度より、工費五百八十萬圓を投じ、埠頭一本を築造し又更に昭和十八年度より工費四百萬圓を投じて機帆船専用岸壁を築造することとなり、海陸空の立體的國際港として、又東亞共榮圏の據點として持つ意義は極めて重大となつた。

尙福岡市は那珂川を境とし、西は城下町福岡となり、東は「みなと」博多となる。

縣廳、市廳は福岡の地にあり、主なる銀行、船會社、博多驛、海運局などは商店街博多にある。

從來内航船の定期航路は朝鮮郵船の鮮滿九州線及北鮮線、大阪線、九州郵船の博多釜山線及博多嚴原線、大阪商船の高雄清津線、横濱高雄線、横濱大連線の三線、其他尼崎汽船の大阪三池線などあり、外國貿易船の定期船は昭和十二年岡崎汽船の博多營口線創設を嚆矢とし、昭和十三年大連汽船の天津航路開設を見、昭和十四年には東亞海運の横濱大連線實現し、其他の會社に於ても博多港利用に重大なる關心を寄せてゐたが、大東亞戰爭勃發後國家の要請に基き大埠頭及臨港特定地域は〇〇方面の御召に預り博多港の兵站基地たるの眞價を如實に物語つて居り、尙近き將來には一般交易方面に於ても利用活潑を豫想せられる。

二

第一節 博多港外國貿易

昭和年間の博多港外國貿易額は左の如く、昭和元年は四百六拾九萬圓にして逐年増加の趨勢を示し、昭和十二年は十一月中旬を以て一千萬圓の新記録をつくりて千百七十六萬圓となり、昭和十三年以降事變下にありて尙相當好況を持續して居る。

昭和元年	四、六九一、〇一一圓
昭和二年	四、九九〇、〇五〇圓
昭和三年	五、三五六、六〇九圓
昭和四年	六、一九五、九七九圓
昭和五年	五、三六三、九三三圓
昭和六年	四、五一七、三一八圓

967
E357

昭和七年	五、五五七、一四三圓
昭和八年	五、七二三、三二三圓
昭和九年	五、八一三、七三四圓
昭和十年	八、〇〇三、七〇四圓
昭和十一年	九、四七一、九〇六圓
昭和十二年	一一、七六三、三七一圓
昭和十三年	一一、三六二、五二四圓
昭和十四年	一一、一三二、〇四九圓
昭和十五年	〇〇圓
昭和十六年	〇〇圓
昭和十七年	〇〇圓

右期間中の輸出貿易は著しき遞増を示し、開港以來の輸入超過は次第に緩和せられ昭和十一年より輸出に好轉し出超額は逐年著増、昭和七年以降新興貿易品の進出凌じきものあり博多港の商港たるの地位ますます重きを加へた。

而して昭和十六年は純戰時下に於て統制經濟より計畫經濟となり且船舶の供給著しく窮屈となりたるが爲、貿易は多大の減少となるべく豫想せられたるも、輸出は前年に比し〇〇萬圓減額程度に止り、輸入亦上半期輸入多かりし爲約〇〇萬圓減であつた。昭和十七年度は更に低下を見たが各方面の經濟狀勢より見て博多港の外國貿易は昭和十七年をドン底とし漸次更生發展の道程を辿るものと推定される。輸出、輸入貿易額、左の如くである。

三

昭 和	年	輸 入		輸 入 超 (△入超)
		輸 入	輸 出	
昭 和	八 年	二、一八五、八九四	三、六〇二、六一七圓	△一、四八一、九一二圓
昭 和	九 年	二、一八五、八九四	三、六二七、八四〇	△一、四四一、九四六
昭 和	十 年	三、八八六、〇二五	四、一一七、六七九	△二三一、六五四
昭 和	十 一 年	五、〇二八、二〇三	四、四四三、七〇三	五八四、五〇〇
昭 和	十 二 年	六、九七五、七〇七	四、七八七、六六四	二、一八八、〇四三
昭 和	十 三 年	八、五五五、四八五	三、三一三、〇五一	五、二四二、四三三
昭 和	十 四 年	一〇、〇四四、九七七	二、〇八七、〇七二	七、九五七、九〇五
昭 和	十 五 年	〇〇	〇〇	〇〇
昭 和	十 六 年	〇〇	〇〇	〇〇
昭 和	十 七 年	〇〇	〇〇	〇〇

事變直前昭和十一年より最近に至る輸出入別にその大勢を述べれば左の如くである。

(一) 輸 出

昭和十一年の十萬圓以上は二百八十七萬圓のゴム靴類を大宗とし三十萬圓臺の地下足袋、紙類之に次ぎ小麥粉、麥酒、ポイラーにして、ゴム製品は靴、地下足袋等を併せて三百四十萬圓で、輸出總額五百萬圓の約七割近きを示してゐる。

昭和十二年は前記重要品に更にタイヤ、木材、打綿、罐詰食料品などを加へたるが、尙ゴム製品は四百八十五萬圓の巨額を算し輸出總額の約七割に達してゐる。

愈々純戦時體制に入りたる昭和十三年はゴム製品は前年に比し半近くを減し二百六十四萬圓となりたるも、北支航路開かれ小麥粉は二百二十二萬圓に、木材は八十三萬圓に飛躍して之をカバーし總輸出八百五十五萬圓の好況を示した。

昭和十四年は圓ブロック内の調整令など發動し、ゴム製品は更に轉落して二十萬圓となりたるも、木材斷然頭角を顯して四百十一萬圓の巨費を示し、小麥粉は百萬圓臺に下り、紙類は八十萬圓臺に上り、菓子三十六萬圓、罐詰食料品の三十三萬圓、其他の機械類三十九萬圓などありて總額に於て輸出二千萬圓のレコードを示した。

昭和十五年は物動計畫の發動を見爲替、貿易、船舶等の統制いよゝ緊密となり、結局總額に於て前年より〇〇萬圓弱を減じて〇〇萬圓に落付いた。

昭和十六年は統制經濟より計畫經濟となり、船舶の配船極めて窮屈となりたるが爲著減を豫想せられたるも、輸出入併せて〇〇萬圓程度に止つたのである。

(二) 輸 入

輸入は事變勃發の昭和十二年の四百七十八萬圓を以て頂上として輸入抑制等のため漸減し、昭和十六年は米國資金凍結令等の爲第三國貿易は上半期後全滅した。

昭、和、十、七、年、の、貿、易、推、定、

昭和十七年は大東亞戰爭勃發の第一年である。海運、陸運共いよゝ窮屈となり、結果輸出〇〇圓、

輸入〇〇圓、計〇〇圓に低下した。以下重要輸出入品につき將來の見透しを述べれば左の如く、之を要するに將來の貿易は結局船舶の配給及港灣設備の整備如何に落付くものである。博多港としては秘藏子「大連汽船清河丸」を育成して博多港のみにて滿載せしむる方途を講じて次ぎに此種船舶の配船を増加すべきである。而して諸般の事情に依り鹿兒島、三角、長崎方面生産大連方面行貨物は漸次博多港に殺到せられる状態と見受けられ、昭和十七年の外國貿易をドン底としてポツ／＼九州の對大陸貿易港としての存在を示現せられることとなつた。

(一) 輸出品

- 蔬菜種子 市内出の外長崎地方のものもポツ／＼出貨、滿洲國向が主、今後有望。
- 殺虫粉 市内、九州種苗會社出種子と同様、一部鐵道(朝鮮經由)、滿洲國農産物増産計畫に連れて有望。
- 煙火 永年滿洲國行ありたるも今後は見込なし。
- 眞綿、布綿製品 右二品はおたふく綿會社の現地出店宛の輸出である。纖維統制關係にて將來望み薄。
- 紙類 主として八女郡産、塵紙、燒紙にして博多港輸出品の花形で滿、關、支行、原料不足、勞力問題等の關係上將來の發展は望み薄。
- 紙製品 久留米産、日本ゴムの遊休設備を利用したる紙箱で有望であつたが十七年は更に大連、新京、北京、上海行の西日本新聞紙が博多港經由となつたので將來有望。
- 陶磁器 小倉東洋陶器會社生産に係る衛生陶器は皆無となつたが有田産陶器増産。將來有望。
- 農具 磯野製作所の輸出に係る。全所の分工場滿洲延吉移駐により、全所の分は一時減少すべきも、滿支食糧増産計畫に順應する爲農具の輸出は今後増加の見込。
- 花 當市に東亞敷物輸出會社創設せられ、九州一圓の外島取縣、山口縣産なども博多港に集る筈。將來有望。

- 竹材 糸島和屋築紫三郡産に加ふるに最近鹿兒島、大分方面よりポツ／＼出荷あり、鹿兒島産は特に有望。
- 樽用板 久留米其他、醬油、味噌工場現地移駐に伴ひて出荷するもので今後共有望。
- 木材 民需の輸出見込薄。

(二) 輸入品

豆類 朝鮮郵船の航路廢止の爲見込立たず。
次に外國貿易貨物噸量は昭和十三年の輸出十二萬五千噸、輸入五萬七千噸計十八萬二千噸を最高とし漸次減少し最近は半減する。即ち昭和十七年は昭和十六年より稍少く、昭和十五年に比すれば約四割減である。減少率の大なるは木材の著減である。
入港船舶は昭和十四年二百卅八隻二十萬噸であつた。今後諸種の事情により博多港に於て船用炭積込船入港増加の見込である。

第二節 博多港内國貿易

博多港過去十ヶ年の内國貿易噸量價格は左の如く、昭和八年百十九萬噸、四千萬圓より逐年遞増、昭和十七年は二百萬噸、一億七千七百萬圓を算し、噸量に於て六割七分、價格に於て卅四割増を示してゐる。

昭和八年	一、一九一、九六〇噸	四〇、六九三、二〇九圓
昭和九年	一、三六五、九六一	四三、八七九、七一〇
昭和十年	一、六二〇、九九七	四五、七五六、三四九
昭和十一年	一、六七〇、一四五	五一、九六一、一〇八

昭	和	十二	一、八二〇、九〇九	六〇、七五〇、〇七二
昭	和	十三年	一、八四八、一〇一	七三、九九九、〇七六
昭	和	十四年	一、八一九、〇三三	九一、八〇七、六二三
昭	和	十五年	一、八五六、六七一	九三、七九七、〇四八
昭	和	十六年	二、〇七四、六四〇	一〇二、六一七、四一八
昭	和	十七年	二、〇〇五、九三八	一七七、九五四、三四七

更に之を移出、移入別に見れば。

昭	和	八	一、〇〇九、四四一噸	二〇、八七五、二四七噸	一九、八一七、九六二噸
昭	和	九年	一、一四六、五七二	二三、五九一、〇二〇	二〇、二八八、六九〇
昭	和	十年	一、四〇四、一五九	二五、九一〇、三八四	一九、八四五、九六五
昭	和	十一年	一、四四一、二八八	三一、一七〇、九七七	二〇、七九〇、一三一
昭	和	十二年	一、五五五、八〇四	三四、八六八、三七四	二五、八八一、六九九
昭	和	十三年	一、五六〇、七五四	四二、〇七九、二七八	二八、七、三四七
昭	和	十四年	一、五九七、三三八	五七、五〇一、〇三一	二二、一、六九五
昭	和	十五年	一、六三一、五七一	五六、二七三、八六〇	二二、五、一〇〇
昭	和	十六年	一、八九八、九三五	六四、一五二、四〇六	一七、五、七〇五
昭	和	十七年	一、八五六、八〇八	七七、一五二、〇七四	一四、九、一三〇

の如く移出が移入より噸量、價額共遙に大なるは粕屋炭田石炭積出の爲である。
 關係港灣を見るに、内地貿易は大阪、壹岐、對馬最も多く、東は瀬戸内海各港より伊勢灣、東京灣、敦賀港に、西は佐賀、長崎兩縣下より鹿兒島港に及び朝鮮貿易は釜山を第一とし、朝鮮東、西兩海岸を

網羅したが、臺灣貿易は皆無となつた。

昭和十七年中十萬圓以上の移出入品は左の如く、移出は石炭の三千八百八十九萬圓を大宗とし、金屬及同製品の七百三十七萬圓之に次ぎ、以下百萬圓以上干甘藷、雜貨、織物、其他食料品、菓子油、木材罐詰食料品、藥品などの順であり、移入は金屬及同製品の六千百萬圓を第一とし鮮魚介の二千二百萬圓之に次ぎ以下百萬圓以上は干甘藷、砂糖、雜貨、油類である。(單位千圓)

移出	石炭	三、八、八九四	木材	一、九三二	織物	三、一一六
	パル	七、八七	金屬及同製品	七、三七六	罐詰食料品	一、八四八
	機械類	八〇五	清酒、燒酎	五八三	干甘藷	三、九九四
	麥芽	二四六	米	四八〇	草	五八六
	煉乳	二〇九	麥酒	八一三	水	四七七
	調味料	二六二	蔬菜	三〇三	紙製品	三四六
	製紙	二八〇	空瓶	四二九	木製品	一三四
	陶磁器	二四二	菓子	一、一四一	果實	三七三
	其他の食料品	三、〇一三	油	二、四二二	其他の紙物	一五六
	農具、船具	二八五	書籍及び雜誌	二八三	其他の紙物	一五二
	肥料及び飼料	一七六	木	四三〇	雜貨	一一二
	鮮魚介	一一八	油類	一、一八四	金屬同製品	三、二九一
	パル	二三一	牛	一、一八四	食實	六、六六四
	鯨肉	七八一	麥	一、一三三	石	一、四四
	其他の海産物	三三〇	酒炭	七、八三	材	四二四
				三六九		一〇一

尙主要移出品の噸量及之が消長、仕向、仕出の概要左の如くである。

(一) 移出品

石炭	昭和三十七年百二十六萬噸より逐年増加、昭和三十六年は百六十五萬噸昭和三十七年は百六十九萬噸となる。仕向先は瀬戸内海を第一とし、伊勢灣、朝鮮方面向大である。	二六〇	藥具其他品	一三五	干甘藷	三、二一八
干藷	昭和三十七年四千九百噸、阪神へ。	一八七	船具其他品	一三一	砂糖	一、四二二
木材	昭和三十年の一萬五千噸より遞増、昭和三十四年は二十四萬噸となりたるも昭和三十五年、十六年は十萬噸、昭和三十七年は二萬噸となる。若松、釜山向が多い。	四八二	織物類	二六八	罐詰食品	一五六
織物類	昭和三十年以降十五年迄は五百噸乃至千噸であつたが、昭和三十六年、昭和三十七年は千二百餘噸に増加した。主たる仕向先は朝鮮、壹岐、對馬などである。	二七〇	煎子類	四二二	菓子油	一二二
木	昭和三十七年千三百餘噸にして、朝鮮行が主である。	一〇六	染料	一一九	瓦	一二六
千	昭和三十七年千三百餘噸にして、朝鮮行が主である。	一八一	乾魚	七八五	海草	一〇三
糖	昭和三十七年千六百餘噸、壹岐、對馬、朝鮮各地へ。	一一〇	魚	二六〇	雜貨	一、八七二
其他食料品	昭和三十七年千六百餘噸、壹岐、對馬、朝鮮各地へ。	二六〇	魚	二六〇		

昭和三十七年九百七十噸、主として壹岐、對馬向である。
 昭和三十七年二千餘噸にして前年より減少、主たる仕向地は仁川、釜山である。
 昭和三十七年五千餘噸、仕向地は朝鮮が主である。
 近年二千噸内外、壹岐、對馬仕向である。
 年々五百噸内外壹岐、對馬行。
 昭和三十七年三千四百餘噸、阪神へ。
 昭和三十七年三千六百噸、壹岐、對馬、朝鮮、大阪方面へ。

(二) 移入品

鮮魚介 昭和三十七年は四萬七千餘噸にして、前年より稍少く仕向地は支那海、朝鮮沖、壹岐、對馬。
 金屬物及同製品 昭和三十七年八千餘噸である。仕向地は大阪、朝鮮方面である。
 干甘藷 昭和三十七年四千餘噸、鹿兒島より。
 油類 昭和三十七年一萬五千四百餘噸にして、茲數年の平均より増加、下關等より移入。
 塩乾魚類 昭和三十七年の塩乾魚類は二千二百餘噸にして對馬、壹岐生産である。
 鯨肉 昭和三十七年千五百餘噸、昨年より増。主として朝鮮沖産。
 木炭 薪を併せて昭和三十七年一萬五千噸、對馬産。食鹽昭和三十七年八千餘噸にして、近年の最高、山口縣防府、關門、下松、柳井より。
 麥酒 昭和三十七年九百餘噸、門司、廣島より。
 砂糖 昭和三十七年二千噸門司より。

次に移出品の仕向、仕出地別五萬圓以上（但石炭は十萬圓以上）のものを掲記すれば左の通りである。

全	全	全	全	全	全	全	全	石	全	書	紙	其	全	製	全	全	バ	毛	全
								炭	籍	他	の	紙	紙	紙	紙	ル	織		
									及	製									
									誌	品									

五、六、七	五、三、〇	三、〇、一七	三、一、五八	一、一七、五	四、三、七〇	四、四、七〇	一、四、一四	一、三、二〇	一、三、六二	一、三、六二	一、三、六二	一、三、六二	一、三、六二	一、三、六二	一、三、六二	一、三、六二	一、三、六二	一、三、六二	一、三、六二
五、六、七	五、三、〇	三、〇、一七	三、一、五八	一、一七、五	四、三、七〇	四、四、七〇	一、四、一四	一、三、二〇	一、三、六二	一、三、六二	一、三、六二	一、三、六二	一、三、六二	一、三、六二	一、三、六二	一、三、六二	一、三、六二	一、三、六二	一、三、六二

富	名	釜	朝	士	糸	神	徳	和	尼	大	對	朝	仁	朝	羅	仁	高	大	新	朝	朝	對
古																						
田	屋	山	鮮	呂	崎	戸	山	山	崎	阪	馬	鮮	川	鮮	津	川	松	阪	港	鮮	鮮	馬

陶	放	鐵	珠	鐵	鍛	全	丸	輕	煉	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全
磁	器	器	器	器	器	器	器	器	器	器	器	器	器	器	器	器	器	器	器	器	器	器

五、六、七	一、〇、〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇
五、六、七	一、〇、〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇

仁	仁	仁	朝	對	大	長	仁	大	大	高	乙	木	宇	岸	新	飾	三	鐘	吹	敦	高	洲
川	川	川	鮮	馬	阪	府	川	阪	阪	知	島	浦	品	田	濱	原	島	田	質	砂	本	

繹	煉	全	全	麥	全	果	密	全	全	清	干	全	全	蔬	海	麥	全	白	苗	品	
詰	及																				
食	料																				
品	乳	酒	實	柑	酒	蔬	甘														

二、〇〇〇	二、〇〇〇	五、〇〇〇	七、〇〇〇	五、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇
二、〇〇〇	二、〇〇〇	五、〇〇〇	七、〇〇〇	五、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇

釜	仁	朝	釜	仁	朝	對	釜	朝	壹	對	阪	壹	對	朝	莞	仁	壹	對	京	品	
山	川	鮮	山	川	鮮	馬	山	鮮	岐	馬	神	岐	馬	鮮	島	川	岐	馬	城		

絹	全	全	綿	全	全	全	其	全	菜	全	煙	全	全	其	海	水	漬	全	全	品
織			織				他	的	子					食	調	味	物			
物			物				藥	品	油	草				料	品					

五、六	一、三、四、一、九四〇	五、九、二〇〇	三、三、八〇〇	三、三、八〇〇	三、三、八〇〇	三、三、八〇〇	三、三、八〇〇	三、三、八〇〇	三、三、八〇〇	三、三、八〇〇	三、三、八〇〇	三、三、八〇〇	三、三、八〇〇	三、三、八〇〇	三、三、八〇〇	三、三、八〇〇	三、三、八〇〇	三、三、八〇〇	三、三、八〇〇	三、三、八〇〇	三、三、八〇〇
五、六	一、三、四、一、九四〇	五、九、二〇〇	三、三、八〇〇	三、三、八〇〇	三、三、八〇〇	三、三、八〇〇	三、三、八〇〇	三、三、八〇〇	三、三、八〇〇	三、三、八〇〇	三、三、八〇〇	三、三、八〇〇	三、三、八〇〇	三、三、八〇〇	三、三、八〇〇	三、三、八〇〇	三、三、八〇〇	三、三、八〇〇	三、三、八〇〇	三、三、八〇〇	三、三、八〇〇

壹	朝	對	壹	仁	對	朝	壹	大	阪	壹	對	朝	壹	對	朝	壹	對	東	支	朝	壹	朝
岐	鮮	馬	岐	川	馬	鮮	岐	阪	神	岐	馬	鮮	岐	馬	鮮	馬	海	鮮	岐	鮮		

111

111

品名	噸數	價格	仕向
全 魚	二五八	一四一、九〇〇	對 馬
其 他 海 產 物	一六六	九、六〇〇	朝 鮮
蔬 菜	八四〇	三二六、八〇〇	北 鮮
干 菓	一三三	六、一〇〇	朝 鮮
麥 甘	四、一八〇	三、一八、六〇〇	鹿 兒 崎
枇 杷	八五〇	三、一、五〇〇	志 門
罐 詰 食 料	二五〇	七、五〇〇	朝 鮮
鯨 肉	一、七三三	七、一、〇〇〇	朝 鮮
砂 糖	一、五六一	一、三三、四〇〇	朝 鮮
揮 發 油	五六一	二四、四〇〇	下 門
輕 油	五五九	五、六〇〇	全 全
機 油	八七四	二、三、三〇〇	全 全
マ シ ン	三七三	五九、六〇〇	全 全
重 油	二、六四九	六、九、九〇〇	全 全
全 油	九四三	一、〇、七〇〇	全 全
菜 子 油	一七六	一、三、三〇〇	大 門
其 他 的 藥 品	一四三	八、五、一〇〇	全 全
染 料	二九八	一、九、一〇〇	全 全
綿 織 物	一三四	二、八、〇〇〇	全 全
全 魚	二五八	一四一、九〇〇	對 馬
其 他 海 產 物	一六六	九、六〇〇	朝 鮮
蔬 菜	八四〇	三二六、八〇〇	北 鮮
干 菓	一三三	六、一〇〇	朝 鮮
麥 甘	四、一八〇	三、一八、六〇〇	鹿 兒 崎
枇 杷	八五〇	三、一、五〇〇	志 門
罐 詰 食 料	二五〇	七、五〇〇	朝 鮮
鯨 肉	一、七三三	七、一、〇〇〇	朝 鮮
砂 糖	一、五六一	一、三三、四〇〇	朝 鮮
揮 發 油	五六一	二四、四〇〇	下 門
輕 油	五五九	五、六〇〇	全 全
機 油	八七四	二、三、三〇〇	全 全
マ シ ン	三七三	五九、六〇〇	全 全
重 油	二、六四九	六、九、九〇〇	全 全
全 油	九四三	一、〇、七〇〇	全 全
菜 子 油	一七六	一、三、三〇〇	大 門
其 他 的 藥 品	一四三	八、五、一〇〇	全 全
染 料	二九八	一、九、一〇〇	全 全
綿 織 物	一三四	二、八、〇〇〇	全 全

品名	噸數	價格	仕向
全 魚	二五八	一四一、九〇〇	對 馬
其 他 海 產 物	一六六	九、六〇〇	朝 鮮
蔬 菜	八四〇	三二六、八〇〇	北 鮮
干 菓	一三三	六、一〇〇	朝 鮮
麥 甘	四、一八〇	三、一八、六〇〇	鹿 兒 崎
枇 杷	八五〇	三、一、五〇〇	志 門
罐 詰 食 料	二五〇	七、五〇〇	朝 鮮
鯨 肉	一、七三三	七、一、〇〇〇	朝 鮮
砂 糖	一、五六一	一、三三、四〇〇	朝 鮮
揮 發 油	五六一	二四、四〇〇	下 門
輕 油	五五九	五、六〇〇	全 全
機 油	八七四	二、三、三〇〇	全 全
マ シ ン	三七三	五九、六〇〇	全 全
重 油	二、六四九	六、九、九〇〇	全 全
全 油	九四三	一、〇、七〇〇	全 全
菜 子 油	一七六	一、三、三〇〇	大 門
其 他 的 藥 品	一四三	八、五、一〇〇	全 全
染 料	二九八	一、九、一〇〇	全 全
綿 織 物	一三四	二、八、〇〇〇	全 全

品名	噸數	價格	仕向
全 魚	二五八	一四一、九〇〇	對 馬
其 他 海 產 物	一六六	九、六〇〇	朝 鮮
蔬 菜	八四〇	三二六、八〇〇	北 鮮
干 菓	一三三	六、一〇〇	朝 鮮
麥 甘	四、一八〇	三、一八、六〇〇	鹿 兒 崎
枇 杷	八五〇	三、一、五〇〇	志 門
罐 詰 食 料	二五〇	七、五〇〇	朝 鮮
鯨 肉	一、七三三	七、一、〇〇〇	朝 鮮
砂 糖	一、五六一	一、三三、四〇〇	朝 鮮
揮 發 油	五六一	二四、四〇〇	下 門
輕 油	五五九	五、六〇〇	全 全
機 油	八七四	二、三、三〇〇	全 全
マ シ ン	三七三	五九、六〇〇	全 全
重 油	二、六四九	六、九、九〇〇	全 全
全 油	九四三	一、〇、七〇〇	全 全
菜 子 油	一七六	一、三、三〇〇	大 門
其 他 的 藥 品	一四三	八、五、一〇〇	全 全
染 料	二九八	一、九、一〇〇	全 全
綿 織 物	一三四	二、八、〇〇〇	全 全

第二章 博多港背域貿易關係會社工場

第一節 福岡市及其附近

福岡市及其附近に於ける昭和十七年中輸移出入貿易關係會社は紡績製綿工業一、護謨工業一、鐵工諸機械工業八、食品工業二、麥酒工業一、製粉工業一、紙器工業一、博多名産工業一、油脂工業一、其の他の工業四、合計二一にして、前年二七に對し二割、前々年五二に對し六割減である。而して其の原料製品は左表の如く、原料五三、五〇八噸、二三、二六八、一七五圓、製品八六、七六六噸、五八、九二九、八八四圓合計一四〇、二七四噸、八二、一九八、〇五九圓にして、原料は噸量に於て製粉工業、鐵工機械工業多く、價額に於て博多名産工業、護謨工業、製粉工業、鐵工諸機械工業の順である。製品は噸量に於て麥酒工業頭抜けて多く食品工業、製粉工業、鐵工機械工業之に次ぎ、價額に於ては博多名産工業、麥酒工業、護謨工業、鐵工機械工業の順である。前年に比し噸量は原料製品共に減少し、價額は原料百萬圓餘減少し、製品は六百萬圓餘の増加である。

以上の如く、大東亞戰爭後に於ける貿易關係會社工場數の著減、原料製品數量の減少は物動計畫による現地自給自足方針の確立、企業整備の進捗等によるものであるが船腹の不足もまた見逃すべからざる原因に屬する。今後この趨勢は當分持續されるものと思はれるも南方の生〇〇、〇〇、佛印の玉蜀黍、滿洲の銑鐵、大豆、石綿、〇〇、朝鮮の製鋼原料、北支朝鮮の棉花、並外米、外塩などがポツ／＼到來

するを見るは喜ばしい現象である。

(噸量の下括弧内の數字は原料又は製品に對する外地産又は外地行歩合)

工業種別	原	料	製	品
紡績製綿工業	八八八 <small>(57)</small>	七三六、七七三	六一八 <small>(8)</small>	八九四、五八〇
護謨工業	四、三五〇 <small>(21)</small>	四、三三三、三八八	三、八三五 <small>(30)</small>	九、七四五、〇〇〇
鐵工諸機械工業	一〇、八八一 <small>(16)</small>	一、六一五、二六一	八、二九六 <small>(38)</small>	六、一七五、三〇六
食品工業	四、一〇三 <small>(50)</small>	七四五、五八二	九、三五〇 <small>(0.5)</small>	一、八九四、九〇八
麥酒工業	八、二二六 <small>(17)</small>	一、〇九七、九三〇	三九、三八〇 <small>(23)</small>	一、二、九〇〇、〇〇〇
製粉工業	一一、二五八 <small>(5)</small>	二、七四八、三六〇	八、八六五 <small>(0)</small>	二、二二三、八一八
紙器工業	四、九〇〇 <small>(20)</small>	六九〇、〇〇〇	七、八〇〇 <small>(100)</small>	八八〇、〇〇〇
博多名産工業	五五〇 <small>(0)</small>	一〇、〇〇〇、〇〇〇	七五〇 <small>(1)</small>	二一、二八七、〇八六
油脂工業	四、三〇〇 <small>(100)</small>	一、〇五二、〇〇〇	三、九八〇 <small>(0)</small>	一、六五四、〇〇〇
其他の工業	三、〇五二 <small>(8)</small>	二五八、八八一	三、八九二 <small>(3)</small>	一、二六四、一八六
合計	五三、五〇八 <small>(22)</small>	二三、二六八、一七五	八六、七六六 <small>(24)</small>	五八、九二七、八八四

次に原料製品の集散状態を見れば。

原料 は内地産四〇、六八七噸、一八、五〇九、二六八圓、外地産一二、八二一噸四、七五八、九〇

七圓にして、外地産は原料の約二割二分を占め前年の約一〇五分より七分多く、外地産原料の入貨増を示す。而して之が輸移入港別左の如くである。

博多港	三、一七七噸	七二二、一二七圓	前年に比し四割減。
關門港	九、二五五噸	三、八一三、三八〇圓	前年の三倍増。
阪神港(主として神戸)	一、二五噸	一九〇、四〇〇圓	前年に比し半減。
朝鮮(汽車)	二六四噸	四三、〇〇〇圓	新記録。

製品は内地行六五、五四一噸、四九、三四二、五四四圓、外地行二一、二二五噸、九、五八五、三四〇圓にして、外地行は製品の約二割四分にして前年より歩合は稍多きも噸量、價額共出貨減である。而して之が輸移出港別左の如くである。

博多港	二、〇一七噸	一、三七五、五七四圓	前年の六分の一に減少。
關門港	一四、〇九三噸	六、三〇一、五九八圓	前年に比し四割増。
神戸港	四、一〇〇噸	一、五八二、三五〇圓	前年に比し三割増。
長崎港	一、〇一五噸	三二五、八一八圓	一時的現象。

右の如く地元福岡市内貿易關係會社工場原料製品の大部が運賃を無視し、運輸交通の隘路を押して博多港を利用せずして遠く關門又は阪神經由に移行の傾向は輸送船團の強化、船腹不足に基因するものなるべしと雖大東亞共榮圈の總兵站基地としての博多港が漸く世上に認識を深められつゝあるの秋洵に遺憾とする所である。機帆船に對する港灣設備、充分なる假倉庫の用意、船員、勞務者に對する温き福利施設が急務中の急務である。

更に各工業別にその大體を觀れば。

◎紡績製綿工業

紡績製綿工業は鐘紡、おたふく綿、藤野製綿の三であつたが、原料の關係上藤野製綿は昭和十六年より内地需給關係となり、鐘紡は昭和十七年休止状態に入り、所謂第一種工業部門として企業整備せられた。

おたふく綿の原料製品の大體左の如くである。

原料	八八八噸(97%)	製	品	六一八噸(8%)	八九四、五八〇圓	
昭和十一年	十二噸	十三年	十四年	十五年	十六年	十七年
三七、四九〇	二一、五七六	一〇、〇五八	五、九〇二	五、六一六	二、八二七	八九四

尙製綿工業過去七ヶ年の生産高左の如くジリ減を示してゐる。(單位千圓)

◎護謨工業

護謨工業は日本ゴム福岡〇〇である。従來日本ゴム〇〇工場及九州ゴム合資會社の二なりしが、九州ゴムは内地需給のみとなる。

ゴムは再生ゴムに新に輸入ゴムを加へ、相當活況となるべき模様なるも民需は尙前年に比し減少である。

原料	四、三五〇噸(21%)	四、三二三、三八八圓	製	品	三、八三五噸(30%)	九、七四五〇〇圓
----	-------------	------------	---	---	-------------	----------

過去七ヶ年の生産高左の如くである。(単位千圓)

昭和十一年	十二年	十三年	十四年	十五年	十六年	十七年
一二、五〇〇	一〇、八二三	一〇、四〇三	八、二八八	八、〇五一	九、七四〇	九、七四五

◎ 鐵工諸機械工業

鐵工諸機械工業は從來より外地關係を有したる株式會社博多鐵工所(舊博多コースター)川島鐵工所、福岡水産鐵工所、鳥井鐵工所などが軍需品に轉向などの爲退き左記磯野七平製作所外七工場となつた。

會社名	原	料	製	品
磯野七平製作所	四、二〇〇 <small>(6)</small>	四一七、六二五 <small>円</small>	三、七三九 <small>(40)</small>	一、〇九五、二一三 <small>円</small>
合名會社 深見製鋼所	一、七七七 <small>(19)</small>	一八三、六〇〇	八四〇 <small>(12)</small>	五八六、八〇〇
旭鶴興業株式會社	四三〇 <small>(0)</small>	一二四、五五七	六二三 <small>(79)</small>	四〇四、〇〇一
昭和鐵工株式會社	二、〇四〇 <small>(53)</small>	二五二、〇〇〇	一、〇二〇 <small>(3)</small>	六五九、〇〇〇
西部電氣工業株式會社	三四八 <small>(0)</small>	一七五、〇〇〇	七九一 <small>(21)</small>	一、四四四、六三六
末次鐵工所	四〇七 <small>(0)</small>	九二、八三四	四〇〇 <small>(10)</small>	四六一、四一一
高橋鐵工所	一三 <small>(100)</small>	一、九三七	一八 <small>(0)</small>	一四、四〇〇
多々良製作所	一、六六六 <small>(0)</small>	三六七、七〇八	八六五 <small>(84)</small>	一、五〇九、八四五
計	一〇、八八一 <small>(16)</small>	一、六一五、二六一	八、二九六 <small>(38)</small>	六、一七五、三〇六

過去七年の生産高は左の如く、軍需工業に轉向のため昭和十四年を頂上とし漸減の傾向に見受けられる。(単位千圓)

昭和十一年	十二年	十三年	十四年	十五年	十六年	十七年
四、七九六	六、〇二九	六、〇七二	八、五一四	八、一一〇	八、四七二	六、一七五

◎ 食料品工業

食料品工業は日本調味、福岡酢造の二である。從來參松工業會社が外米の輸入、飴、菓子類の輸出に より大に氣を吐きたるも昭和十六年よりバツタリ止み、その他一二個人商社も姿を消してしまつた。

會社名	原	料	製	品
福岡酢造株式會社	一〇〇〇 <small>(80)</small>	二九、〇七三 <small>円</small>	九九三 <small>(5)</small>	一三二、四〇八 <small>円</small>
日本調味料株式會社	四、〇〇三 <small>(49)</small>	七一六、五〇九	八、三五七 <small>(0)</small>	一、七六二、五〇〇
計	四、一〇三 <small>(50)</small>	七四五、五八二	九、三五〇 <small>(0.5)</small>	一、八九四、九〇八

過去四年の生産高左の如くである。(単位千圓)

昭和十四年	十五年	十六年	十七年
二、五八八	三、六二四	一、五九五	一、八九四

◎ 麥酒工業

大日本麥酒會社の一である。過去三年の原料製品左の如く、昭和十七年は前年に比し原料製品共に増加し、外地關係も激増である。

年度別	原	料	製	品
昭和十四年	三、二六二	二、五八八	二一、八八七	三、六〇五
昭和十五年	二、九〇〇	一、九八〇	四一、八八八	一〇、〇五二
昭和十六年	二、八四八(0)	九八四	三八、五〇〇	八、〇〇〇
昭和十七年	八、二二六(17)	一、〇九七	三九、三八〇(28)	一一、九〇〇

◎ 製粉工業

製粉工業は東福製粉一社であり、原料小麥は内地産、玉蜀黍は佛印産である。前年より減少。過去七年の生産高左の如くである。(單位千圓)

年度	原料	製品
昭和十一年	一、二、五二八噸(5)%	八、八六五噸(0)%
昭和十二年	一、五〇三	二、七二〇
昭和十三年	三、五四〇	二、七二三
昭和十四年	二、二〇三	二、二二三
昭和十五年	二、七二〇	二、二二三
昭和十六年	二、七二三	二、二二三
昭和十七年	二、二二三	二、二二三

◎ 紙器工業

紙器工業は田中屋本店獨特のものである。最近四年の原料製品の大體は左の如く製品の大部は輸出で昭和十七年は減少である。

年度	原	料	製	品
昭和十四年	二、〇五〇	一、八六八	二、四二八	二、九五三
昭和十五年	二、〇三四	二、〇一三	一、六三四	三、〇四五
昭和十六年	一、一四〇(0)	一六二	二、三七〇(60)	二、六七〇
昭和十七年	四、九〇〇(20)	六九〇	七、八〇〇(100)	八八〇

(備考 十七年度の噸量は過大に計上されてゐる。)

◎ 博多名産工業

博多名産工業と稱するは博多織、博多絞、博多人形、高取焼及野間焼であるが、博多人形は十六年より僅少の小包のみとなつた。博多絞、高取焼及野間焼も昭和十七年より内地關係のみとなりて外地關係のものは博多織だけ残ることとなつた。而して博多織は昭和十七年最高潮に達したる様見受けられるが一部企業整備又は重點的産業部門に轉活用等の爲將來望み薄となつた。

原料 五五〇噸(0)% 一〇、〇〇〇、〇〇〇圓 製品 七五〇噸(1)% 二一、二八九、〇八六圓

過去七年の生産高は左の如くである。(單位千圓)

昭和十一年	十二年	十三年	十四年	十五年	十六年	十七年
四、八八二	四、八〇八	五、三〇九	七、九五〇	一二、四四五	一四、八八〇	二一、二八九

◎油脂工業

大豆工業は日本油脂會社一で、滿洲大豆を輸入し製品は内地販賣である。既往二年の原料製品の大體左の如く、將來有望である。

年 度	原 料	製 品
昭和十六年	二、三八〇 (100)%	五八六 千円
昭和十七年	四、三〇〇 (100)%	一、〇五二
		製 品
		二、二〇六 (100)%
		三、九八〇 (0)
		一、六五四 千円

◎其の他の工業

其他の工業は左の如く常盤スレート外三で、何れも有望。

會 社 名	原 料	製 品
常盤スレート工業社	二、六〇二 (1)	一一八、九二〇 千円
合名會社	一〇〇〇 (0)	一九、八三〇
伊澤武具製作所		三、〇〇〇 (0)
		一一〇 (25)
		四四三、〇八一 千円
		六五、〇〇〇

福岡産業株式會社 <th>藥品部 天洋社 <th>南滿鐵業材株式會社 <th>九州出張所 <th>計</th> </th></th></th>	藥品部 天洋社 <th>南滿鐵業材株式會社 <th>九州出張所 <th>計</th> </th></th>	南滿鐵業材株式會社 <th>九州出張所 <th>計</th> </th>	九州出張所 <th>計</th>	計
一〇〇〇 (0)	九二、六三一	五二二 (14)	五八二、八五五	
二五〇 (100)	二七、五〇〇	二五〇 (0)	一七三、二五〇	
三、〇五二 (8)	二五八、八八一	三、八九二 (3)	一、二六四、一八六	

第二節 久留米及其附近

久留米市及其附近昭和十七年中輸移出入貿易關係會社は護謨工業三、製粉工業三、花莖工業(組合)一、製茶工業(組合)一、鐵工業一紙工業一二計二一工場である。之を前年に對比すれば紡績製綿工業五、硝子工業一、生蠟工業二、漆器工業一、魚貝罐詰工業一、(内容數ヶ所)が時局の影響を受け枕を並べて全面的に後退して、結局、原料、製品共三割乃至四割の減少である。工業別原料製品の數量價額左の如く。

工業種別	原 料	製 品
護謨工業	三九、五八六噸	二〇、八七七噸
製粉工業	六四、二八八	六八、七五四
花莖工業	三、一七五	七、〇〇〇
製茶工業	三、六三〇	四、〇〇〇
鐵工業	七、七四一	四、一九八
硝子工業	四、七七二	四、三四二
生蠟工業	一、二九〇、〇六〇	一〇九、一七一
漆器工業	一、五四五、五〇八	
魚貝罐詰工業	一、二九九、〇六〇	
製茶工業	五五、八八五、八〇五	
計	一二三、一九一	二五

而して原料は左の如く約一割弱九千六百噸千六百萬圓が外地産にして、南方の○○、佛印の玉蜀黍など、主なるもので臺灣の七島草も見受られ、關門港二、阪神一の割合を以て輸移入せられる。之を前年に比すれば約五割の劇増を示して南方地域との交流緊密化を立證し、經由港灣は關門阪神の順に變りはない。

關門港	六、〇〇三噸	八、二六八、六七一圓
阪神港	三、六〇二	七、八五四、二二三
計	九、六〇五	一六、一一二、八九四

次に製品は其の約三割三萬一千噸千六百萬圓が外地行にして、ゴム製品、小麥粉、花筵、紙などが主で、外地行は關門港八七%博多港七%阪神港四%長崎港二%である。更に之を前年に比すれば數量、價額共殆ど半減、共榮圈内の自給自足強化を如實に示し、輸移出港灣は博多港は激減、關門港は著増、輸送船團の寄港が關門港に有利なるを示す。今後この趨勢持續せられるであらう。

博多港	二、二七五噸	一、七五八、六四七圓
關門港	二七、四五九	一一、二〇四、九七三
阪神港	一、二八四	三、一三八、一〇〇
長崎港	五〇〇	二〇〇、〇〇〇
計	三一、五一一	一六、三〇一、七二〇

第三節 佐賀地方

佐賀地方の外國貿易關係會社工場は戸上電氣製作所、西肥板紙、牛津板紙及西九州紙業株式會社の四

で昭和十五年の原料製品は左の如く推定せられる。原料は概ね内地産、製品はその三割が外地行にして門司港、博多港より主として積出されてゐた。

最近戸上電氣は軍管理工場となり内容詳かならざるも九州紙業會社は和紙二百一噸十六萬圓を門司港を経て滿洲國に輸出して居り、西肥板紙、牛津板紙も門司港より相當量の輸出ありたりと推察せられる。

原料	六三、四九五噸	四、四四四、二一四圓
製品	三八、〇二四噸	八、三五四、四七七圓

第四節 日田地方

日田地方の生産品は從來木材を大宗としたるも、統制會社扱となりて軍需以外の外地行は相當窮屈となりたるもの、如く、日田木工株式會社は規模極めて小なるも支那印度産漆を門司港より輸入し、製品漆器を門司港を経て滿洲、朝鮮に輸移出して居る。

第五節 大牟田地方

當地方の鑛業工業は殆ど三井の企業に係り幾多の港灣施設整備してゐる。主なる會社は三井鑛山株式會社○○製鍊所、三井化學工業株式會社○○染料工業所、電氣化學工業株式會社○○工場及鐘淵紡績株式會社○○工場であるが、鐘紡紡績は昭和十七年四月一日以降全面的に操業休止中である。

第六節 熊本縣地方

熊本縣地方は電力、用水に恵まれ肥料、製紙の兩工業は全國屈指の一である。
 主なる會社は日本鑛業株式會社○工場、日本窒素肥料株式會社○○工場及王子製紙株式會社の○
 ○兩工場である。

昭和十四年の推定は。

原料 三九七、二二三噸 二一、五三八、五〇一圓
 製品 二五三、七四三噸 四五、六〇五、二四三圓

日本窒素肥料株式會社○工場

原料 八五、九〇一噸 二、四九九、六七一圓
 製品 一〇三、三〇四噸 二八、一九四、〇〇〇圓 九州、近畿、中國へ。

日本鑛業株式會社○工場

原料 五一、七五七九噸 二、〇五二、三七〇圓
 製品 六八、六九五噸 三、六二四、三二〇圓 九州一圓へ。

王子製紙株式會社○工場

製品の内九、四九一噸 二五三萬圓を門司港を経て滿洲支那佛印方面へ輸出。

第二編 福岡市内主要統制機關

はしがき

福岡市内に於ける統制會機關は石炭、鑛山、電氣機械、産業機械の四で本格的に活動してゐるのは石炭、鑛山の順である。營團は交易、住宅の二で、外に縣食糧營團がある。
 統制會社では石炭統制會の配給部門に任ずる日本石炭、日本石炭の「メンバー」の一なる西九州石炭があり、貿易港灣關係に石炭作業會社、日本貿易振興會社、港運會社、機帆船運送會社、東亞紙貿易、日本輸出農産物、縣木社、日本甘藷馬鈴薯會社などがある。
 尙参考の爲「統制會の現状及其將來統制會と營團」を述べれば左の如くである。

統制會の現状

産業統制會

名	稱	設立年月日	會長	會員數
鐵鋼	統制會	昭和 一六、一一、二〇	平生 鈺三郎	四八社 一工業組合
石炭	統制會	一六、一一、二六	松本 健次郎	二四社 七統制組合
鑛山	統制會	一六、一二、一八	伊藤 文吉	三五社 五統制組合
洋灰	統制會	一六、一二、一八	淺野 總一郎	二〇社

車輛統制會	一六、二二、三二	島安次郎	九〇社
自動車統制會	一六、二二、三四	鈴木重康	七社
精密機械統制會	一七、一、一〇	原清明	五一六社
電氣機械統制會	一七、一、二二	安川第五郎	二四五社 (通信蓄電ヲ人レテ 三〇〇餘)
産業機械統制會	一七、一、二五	大河内正敏	六三四社
金屬工業統制會	一七、一、二五	鈴木元	二一六社
造船統制會	一七、一、二八	斯波孝四郎	二〇社
鐵道軌道統制會	一七、五、三〇	中川正左	三七〇社
輕金屬統制會	一七、九、一	大屋敦	三四社
綿、ヌフ統制會		井上深	二四社
人絹絹統制會		辛島淺彦	三九社
羊毛統制會	一七、九、一九	鶴見左吉雄	二八社
麻統制會		鹿野信	一二社
油脂統制會		藤田政輔	三〇社
皮革統制會	一七、九、二一	鈴木熊太郎	三四社
化學統制會		鈴木忠治	一二九社
ゴム統制會			四組合

金融統制會

全國金融統制會	昭和 一七、五、二三	結城豊太郎	十統制會	六特銀	四金庫
普通銀行統制會	一七、五、一一		十三行		
地方銀行統制會	一七、五、一一		一五〇行		
貯蓄銀行統制會	一七、五、二三		六九行		
勸業金融統制會	一七、五、二四		六行		
信託統制會	一七、五、二二		二一社		
生命保險統制會	一七、五、一四		二七社		
無盡統制會	一七、五、一三		一六〇社		
證券引受會社統制會	一七、五、一二		八社		
市街地信用組合統制會	一七、五、一四		二九一組合		
組合金融統制會	一七、五、三〇		一金庫四七組合	金融統制團	

統制會の將來

統制會は「政府の協力機關として重要政策の立案に對し政府に協力すると共に實施計畫の立案及其の計畫實行の責に任し且必要なる場合に於ては政府に意見を具申する。また前記の計畫實施につき下部經濟團體及所屬企業の指導に任ずる」といふ重大なる責務を有す

るものであり、今後戦時經濟の強化は一に俟つて統制會運営の如何にある。統制會の育成強化は國民の大なる仕事である。統制會は國民のものであり、實に日本全體のものである。官廳側は須らく大乗的な氣持になつて之が強化に努むべきであり、一方民間側にも産業權を官吏の手から民間側に奪ひ返す手段と考へたり或は業者の利益擁護團體と思つたりしてはならない。

統制會は官廳行政の代行機關でもなく、從來のカルテルでもなく、組合でもない。實に統制會は民間の創意とその自主的責任とに於て、國家重要計畫の立案に參詣し、これを遂行する民間團體であることを牢記すべきである。

統制會は指導者原理に基くものであり、統制會の會長、理事長に立派な人物を得ることが統制會の發足に如何に大切なるかはいふ迄もない。

從來の日本の經濟は輕工業に重點があり、重工業、化學工業部門には餘り力が入つてゐなかつた嫌がある。この方面が今日最も必要であるのに、今日まで比較的優秀な人材が集らなかつた傾向がある。

その他統制會今後の懸案としては階級機關の問題、商工業組合の再編成、産業統制會と金融統制會との關聯方法、統制會の經濟強化等多くの問題が山積してゐる。「指導者出でよ」と叫ばねばならぬ。

統制會の制度は從來のものとは根本的に異つた機構と指導理念とを保有するものである。その中に流れる新指導理念たる指導主義、統裁主義の原理こそ從來の個人主義、自由主義、平等主義を排撃し、所謂愚衆多數決原則なる社會の鐵則を根本より覆へたものである。

此の如き新指導理念は全體主義、國家主義の思想に調和し、又現下の我國産業界を確實に統率してその最大能率を發揮せしむるには最善日最適のものである。

統制會と警團

從來の營利を目的とする企業形態にあらざる新しき企業形態に對する要請を生じてきた。この要請に基いて生れたものが警團である。

現在の統制會は會員全體の事業經營を把握指導し、之が綜合運營を圖ることを使命とするも、自ら企業の經營はなし得ない。而して企業の經營それ自體は統制會の指導の範圍に於て會員各自の創意と責任とに於て會員自ら其の獨に當るのである。此の方式こそ經濟新體制の企圖した方式である。然しながら綜合性がより強度である配給、運輸、保管等の生産の補助手段に付ては經濟行爲それ自體をなすことが綜合性の保持の爲に必須とせられる場合も少くないのである。これに應へて生れたのが警團である。

一、石炭統制會福岡支部

業院 堀端 七 電② 三八三二

石炭統制會は石炭産業の綜合的統制運營を圖り且石炭産業に關する國策の立案及遂行に協力するもので、福岡支部の管轄は九州及山口縣である。

會員は一、石炭鑛業を營む鑛業權者にして商工大臣の指定したるもの 二、重要産業團體法に依り設立せられたる石炭統制組合 三、日本石炭株式會社等である。

石炭統制會は生産、資材、監理配給等の部門に分れ、生産數量計畫は本會之を爲し配給部門たる配給計畫、輸送計畫は日本石炭株式會社之を行ふ。

資材は本部に於ては中央單位のもの、支部に於ては縣單位のものを取扱ふ。

尙勞務の確保、配分なども統制會の行ふ重要事項の一である。

二、日本石炭株式會社福岡出張員事務所

下西町 明治屋ビル 電③ 三八九六

日本石炭株式會社の「メンバー」は三井、三菱、古河、貝島、麻生、及西九州、北九州、山口、常盤、北海道の各石炭會社にして、福岡出張員事務所は石炭統制會福岡支部と緊密な關係をとり、粕屋炭田石炭の配給統制、輸送統制を行ふのである。

三、西九州石炭株式會社

下土居町二四ノ一 電③ 一二三一 四五六九

西九州石炭株式會社は日本石炭株式會社の下部機關にして、福岡縣を除きたる九州一圓を管轄とし、

年生産三十萬噸以下の炭坑を擁する。資金百萬圓。

石炭の買入及販賣、石炭の販賣及配給の統制、石炭の輸送、仲介などの事業を行ふ。支店を唐津及佐世保に置く。

代行者は當初一坑一人から數坑一人となり、更に數地區に分ち各地區に一人とした。現在八人なるも重複のものあり結局三人である。指定販賣者は月産一萬噸以上とす、七人あり。

住宅問題は本社のもも苦んでゐる所である。本社は若松より移轉したるが爲現に日豊線より通勤するものなごあり全く困りぬいて居る様である。

四、博多港石炭作業會社

海岸通二丁目一 電③ 三六九一
二二七一

昭和十八年七月十三日西川運輸、長井運輸、辻商店、西川組の四業者を鐵道省の徳憑により免許鐵道小運送業者の資格を以て合同創設したもので資本金拾萬圓である。

貨車卸より接岸荷役積込迄の陸運作業で、西戸崎には別個の業者がある。

年間約六十萬噸の豫定にして概ね柏屋炭である。將來外地炭輸入取扱の見込である。勞務者は平均一日六十人、賃金は請負で約六圓位に當る。

市への要望は九十間の積込場と相當の貯炭場とである。尙勞務者に地下足袋の配給を月一足位に潤澤にしてほしいとの希望である。

引込線完成の上は三池炭や杵島炭も博多港迄陸運に由るべしとの議もある。

五、交易營團福岡支部

東中洲 玉屋内 電② 一六七〇

戦時増強の要諦は綜合國力の集中動員である。就中物資生産擴充の基本となるべき交易はその政策、實施を擧げて此の線に沿はしめ、強力且適當に推進せねばならぬ。殊に支那事變、歐洲大戰、大東亞戰爭へと進展に従て、所謂國際貿易乃至自由貿易は全く解體し共榮圈の計畫交易へと置き換へられた以上其處に新なる機構發足が求められるに至つたのである。

交易營團は昭和十八年六月八日設立された。營團と其の目的左の如くである。

- (イ) 交易の統制運営をなすと共に重要物資の貯蔵を確保増強し茲に貯蔵重要物資の利用を有効適切ならしむ。
- (ロ) 物資の輸出輸入並之に伴ふ當該物資の買入、賣渡
- (ハ) 輸出入物資の範圍 圓ブロック内
專賣物資、特別會計物資(米、麥、木炭等)小麥、飼料を除く。

資本金三億圓 二千五百萬圓政府出資

既存關係機關との關係

重要物資管理營團は交易營團の成立により之に吸収せられ、その業務を繼承すると共に輸出入調整機關五七は存續、三三は整理せられ一元的計畫交易の進展を期してゐる。尤も實務は飽迄業者を活用、本

營團の陣容は重要物資管理營團、民間各商店、貿易統制會、各輸出調整機關等より集り其數三千人以上る。

支部管内に出張所三（長崎は事務所丈）分室一にして、支部管轄は九州及山口である。

主なる業務は調整機關への割當、業者より營團へ買取り、賣買契約、更に營團より業者へ依託、但買取り直輸出のものは木材、ベニヤ板、自動車。

指定受託輸出機關、日本貿易振興株式會社

直扱のものに機關、陶磁器、纖維製品、木材等月三〇萬圓乃至五十萬圓がある。

經營は金利及補助金に依る。

六、日本貿易振興株式會社福岡支店

西中洲 電②一二八六

昭和十六年一月設立、昭和十七年十月元日本東亞必需品輸出組合を合併今日に至る。貿易統制令施行規則並輸出品用原材料配給規則により定められたる業務を行ふ統制會社で、資本金二千五百萬圓、四分の一拂込である。

使命は原料包装材料の配給、受託輸出機關及交易營團の業務の一部を行ふ法人である。

支店の管轄は九州一圓、總務、原料、輸出の三課に分れ更に八係に區分せられる。

市へ對する希望は倉庫の充實及大倉庫業者の誘致である。

七、博多港灣運送株式會社

海岸通二丁目 電③二二七一

博多灣運送會社は陸揚船積より海上作業の全部を一元的に擔任する。陸上運輸の任に當る日本通運會社との間に於ける關係もさしたる問題なし。

八、博多機帆船運送株式會社

石城町 電③四八三五

本社は博多地區機帆船海運組合の地域を營業地域とす。

福岡縣の内福岡市、粕屋郡、早良郡、糸島郡

佐賀縣の内唐津市、東松浦郡、西松浦郡

長崎縣の内壹岐郡、上縣郡、下縣郡

石炭、雜貨の機帆船輸送計畫に依り計畫輸送をなす。

石炭は西日本石炭輸送株式會社が配船計畫をなし、雜貨は本社が機帆船海運組合所屬のもの、配船をなす。

近く機帆船海運組合は發展的解消、全國的なる木船海運協會所屬の機關となる筈である。

機帆船の生活必需品は海運組合に於て之を司り、海員報國團を結成せるも配給所や配給の實際が圓滑ならざるものがある。木船協會が生るれば之を配給所として貰ひたい希望。

機帆船海員組合

電③五、五七二

九、東亞紙貿易株式會社福岡出張所

大名町赤坂門帝建ビル二階 電②二五五三

本社は昭和十五年創立されたるも、本格的に事業を開始せられたるは昭和十六年四月である。貿易業者五百數十を打つて一九三三三六の業者に整備し、紙全部（紙製品を除く）の輸出並其の斡旋をなすのである。

紙は雜貨に屬し、本社も形式上日本貿易振興會社の下部組織をなして居る。

本出張所は九州、沖繩一圓を管轄し。

物動計畫Ⅱ現地要望數量

を睨み合せて主として實績割當により板紙、洋紙、和紙の各統制會社に現品割當を交渉、船腹は海務院に申請する。

陸上運輸は代行者之に當る。代行者は前記三十六の當業者にして、福岡縣の輸出業者は八女郡渡邊長作商店及高千穂製紙會社の二である。

九州出張所の取扱は昭和十六年度は三、四百萬圓に上りたるも昭和十八年度は二百萬ポンド百萬圓の見込にして八女郡其の八割を占む。而して當初は博多港利用大部なりしも船腹の關係上現在は主として門司港利用である。

博多港に定時的の配船を希望してゐるが、運賃は代行者の收支に關係せざるを以て、代行者は遠近といふより、豫定の如く、船積を爲し得る港灣を希望する様である。

十、日本輸出農産物株式會社福岡出張所

大名町 赤坂門 帝建ビル 電②一三四五

日本輸出農産物株式會社法 昭和一五 法律第百號

第一條 政府の指定する農産物（以下指定農産と稱す）の集荷及配給統制を圖る爲必要なる事業を營むむことを目的とす

日本輸農産物株式會社法の施行に關する件 昭和一五 勅令第四百七號

第一條 法第一條の規定に依る農産物の指定

除虫菊、薄荷、青豌豆、菜豆（大手亡、中長鶉、長鶉及大福）菜種、馬鈴薯、澱粉

統制農産物及指定府縣

除虫菊乾花 北海道、和歌山縣、岡山縣、廣島縣、山口縣、香川縣、愛媛縣、長崎縣、大分縣、福井縣、愛知縣、德島縣

薄荷油 北海道、岡山縣、廣島縣、香川縣、熊本縣

菜種油 各道府縣

菜種 各道府縣

集荷 生産者團體殊に産業組合の府縣聯合會に至る迄の集荷統制組織を充分活用せんとして居る。

販賣 輸出組合と相連絡す。

配給の統制——資材、釘、針金、麻袋

集荷を統制して出廻り數量を押へ、軍需、輸出、民需の計畫、配給をなす。輸出は業者を通ずる。雜穀（小豆、豌豆、菜豆、蠶豆、綠豆、紅豆及蕎麥）も昭和十六年十月より内地産、外地産共一元的に統制することとなつた。

要するに農産物の統制會社としての性格を如實に示すこととなつた。

福岡出張所の管轄は、山口、九州であるが雜穀に對しては更に廣島、島根兩縣を加へてゐる。

十一、福岡縣木材株式會社

長濱町一丁目 電② 一、六三五
一、六三六
一、六三七

本社は木材の生産並其の需給の圓滑及價格の公正を圖る爲買入より販賣に至る事業を行ふのである。資本金は一千萬圓で株主は福岡縣木材増産報國會員約千二百人である。十三の出張所、百の配給所、依托製材工場四百十六を有する。

一 生産計畫に關する事項

農林省は物資動員計畫決定後郡の生産計畫に基き年間用途別針濶別生産目標を指示する。

縣は前項の指示に據り縣支社其也素材の生産を爲す者に對し年間用途別生産目標を割當つるのである。

二 配給に關する事項

農林省は物資動員計畫決定後縣に對し用材別區分に依り、用材の供出地需要地及その仕向先別供出並配給割當をなすものとす。

縣は前項の供出配給割當を基とし木材會社の用途別供出配給量並素材の生産を爲す者に對し木材會社への用途別供出量其の也必要なる指示をなすものとす。

尙輸移出用合板に對しては農林省は生産割當に基き日本木材株式會社に配給割當を行ひ、日本社は右の割當に従ひ生産地縣本社より發驛ホーム又は發港棧橋渡を以て買取り、外地向に在りては外地移入機關に對し内地港置場又は外地揚地沖渡を以て、輸向に在りては輸出機關に對し内地港置場渡を以て賣渡すものとす。

輸移出材に在りては日本社は農林省の割當に従ひ供出地木材會社より發驛ホーム渡價格を以て買取り輸出機關に對しては内地港灣置場渡を以て、外地移入機關に對しては揚地港本船乘渡又は内地港置場渡を以て賣渡すものとす。但し電柱、枕木等にして防腐加工を要するものに付ては日本社は其の買取りたる材を供出地發驛ホーム渡價格に右工場迄の運賃諸掛を加算したる額を以て防腐工場に賣渡し防腐加工せるものを買取り之を輸出機關又は外地移入機關に賣渡すものとす。

輸移入材に付ては日本社は輸入機關より内地本船乘渡を以て、外地移入機關より外地又は内地本船乘渡を以て買取り農林省の指示に従ひ需要地の木材會社又は需要者に賣渡すものとす。

十二、日本甘藷馬鈴薯株式會社九州事務所

下西町 安田ビル 電③ 九三三
九三二
九三三

甘藷馬鈴薯は現下實に米麥に亞ぐ主要食糧として重きをなして居るばかりでなく、工業原料即ち酒精、澱粉、燒酎、ブタノール等重要物資製造原料として緊要を加へて來た。本社は之が配給統制機關と

して農林大臣より指定されたる資本金壹千萬圓の統制會社である。當事務所は九州、山口、沖繩の配給統制を行ひ主として燃料局關係の工業原料であるが一部食糧營團にも振り向くる。政府買上、食糧營團賣。

十三、住宅營團福岡支所

須崎裏町 電②二九三三

住宅營團は昭和十六年の創設にして政府出資一億圓、建設資金十億圓の公債發行とし、昭和十六年度庶民住宅三十萬戸建設を對象とした。福岡支所は廣島、山口、九州を管轄區域とし二千六百八十一戸（廣島二〇四、山口二九五、九州二、一八二）であつた。

昭和十七年度は勞務者の住宅で支所管内全體の建設は當初五千三百戸であつたが、二千八百八十四戸に變更せられた。

本昭和十八年度は政府の指定する超重點的工場の住宅で七千八百三十五戸である。一部直營もあるが大體請負である。

將來遊休住宅買収等も住宅營團の所管となるであらう。

市庶民住宅を建設するに當り用地買収の幹施、建設地の希望等に對する協議連絡が必要である。

十四、福岡縣食糧營團

天神町 岩田屋別館 電②二、七六七、二、七六八

本營團は食糧管理法に依り昭和十七年七月二十一日設立、知事の指示する食糧配給計畫に基き主要食糧を配給すると共に之が爲必要なる事業を行ふを以て目的とする。

本營團の資本金は四百八十萬圓で、其の半貳百四十萬圓は中央食糧營團の出資とし、他の半分は業者、職員、業務者の出資で之に對しては六分の配當が保證されてゐる。證券發行が許されてゐるが未だ實行して居らぬ。主要食糧は米、麥、干麵で、甘藷馬鈴薯も加へられることになつた。

買入、賣渡に於ける價格差が運營費である。縣下に二十二の支所を有し、精米所、配給所を持つてゐる。職員は支所を合せて二千五百人である。本營團は三部制にして十三課に分る。市に對する希望は倉庫の充實及之に對する非常防備施設である。

十五、鑛山統制會福岡支部

土手町二〇 電③三〇六七

鑛山統制會福岡支部は福岡鑛山監督局の管轄と同じく九州、山口、沖繩地方を地區とする。石炭、石油などを除きたる鑛産物の統制運營を計り且當該事業に關する國策の遂行に協力するもので生産物に對しては總て事業計畫、輸送計畫を業者、統制會、商工省になし、輸送實施計畫は夫々輸送當局に申請する。

尙鑛山に必要な資材配給、勞務者作業用品並物資特別配給は、統制會に於て之をなし、併せて官の

側面的援助をなすのである。

鑛山の数は大小數百あり、鑛山統制會の單獨會員は大鑛山四十餘にして、小鑛山は統制組合を組織して組合として會員となる。

商工經濟會との關係に就ては北海道、仙臺、東京、大阪、福岡の五支部の内北海道が商工經濟會と其地區を同うするを以て其の會員となるも福岡支部の如きは地方協議會の如き商工經濟會九州地區協議會様なものが出来る迄は入會は考へられない由である。

金鑛採掘中止となり、從て支部の事務に多少のゆとりが出来たらしい。事務所は近く他の鑛山監督局關係統制機關と共に南藥院の鑛山監督局新廳舎に合同移轉の様。

十六、電氣機械統制會福岡事務所

福岡縣商工經濟會三階 電話②三八九一

昭和十七年四月より關係工業組合の事務、職員、接收、受註査定及資材割當事務の引繼等によりて本格的に事務を開始、三百餘の會員との意思疏通を第一に考へ地方連絡機關を設置した。

現在は大阪に出張所、京都、名古屋、福岡に駐在員を置き専ら連絡事務を掌らしめてゐる。福岡事務所の管轄は九州一圓で、主として連絡機關で、地方配給の副資材を取扱つて居る。會員なる會社は本店は左の八社で外に支店あるもの十社である。

- 安川電機製作所
- 西部電機工業株式會社
- 三井〇〇製作所

- 戸上電機製作所(佐賀)
- 三菱電機製作所(長崎)

- 南國電機製作所(鹿兒島)
- 三菱〇〇造船所(長崎)

十七、産業機械統制會九州出張所

大名町 帝建ビル二階 電話②四一五七

産業機械統制會は六百三十四の龐大なる會員を擁し、取扱ひ機種も極めて多く、また各々其の用途機能に異にし實に複雑多岐を極めて居る。

出張所は本部と會員との間の連絡機關たるに過ぎない様である。

會員は左の如くである。

- 鳥井鐵工所
- 末次鐵工所
- 川島鐵工所
- 廣瀬特殊鑄物合金工場
- 立正製作所
- 西部電機工業株式會社(電氣ニモ加入)
- 古賀鐵工所
- 昭和鐵工株式會社
- 東洋空氣會社
- 多々良製作所

十八、其他主なる統制機關

名	稱	所在地	電話
北九州	石炭統制組合	橋口町四六	②五、二五〇
西九州	石炭統制組合	下土居町二四	③一、一一〇

967
357

福岡縣纖維製品配給株式會社
 福岡縣石油配給株式會社
 福岡縣酒類販賣株式會社
 福岡醬油統制株式會社
 福岡味噌統制株式會社
 福岡縣木材株式會社福岡出張所
 福岡縣磷寸販賣株式會社
 福岡縣石炭販賣株式會社東部配給所
 福岡縣石炭販賣株式會社中部配給所
 日本木材株式會社福岡支店
 日本絹人絹織物配給統制會社福岡出張所
 日本出版株式會社九州支店
 博多織產地元賣株式會社
 西部燃料機共販株式會社
 九州硝子販賣統制株式會社
 日本原麻株式會社福岡支店
 日本食肉統制株式會社福岡出張所
 福岡縣食鳥配給株式會社
 日本蠶絲統制株式會社福岡出張所

上西町二八
 雁林町二七
 下土居町二四
 上小山町一九
 下西町明治屋ビル
 千歲町一丁目
 下東町三五
 吉塚三丁目
 新開一丁目
 片土居町十五ビル
 土居町三五
 渡邊通四丁目
 土居町
 上吳服町
 石堂町八
 下西町安田ビル
 藥院堀端產業會館
 西中洲松井ビル
 上吳服町片倉ビル

③ 三、九九八
 ② 四、七六二
 ③ 一、五六五
 ③ 三、六二〇
 ③ 二、七二二
 ③ 二、七七七
 ③ 三、五一七
 ③ 一、八一四
 ② 五、九三〇
 ③ 六、九七
 ③ 一、一二一
 ② 四、二三一
 ③ 一、一一一
 ③ 五、二九
 ③ 一、八八五
 ③ 五、七八四
 ② 五、七二〇
 ② 五、四二四
 ③ 五、七八一

博 多 港

昭和十九年五月十九日印刷
 昭和十九年五月十七日發行

發行所 福岡市役所商工課

編輯人 筒井忠吾
 發行人 筒井忠吾

印刷人 福岡市上新川端町六拾壹番地 猪城秀夫

印刷所 福岡市上新川端町六拾壹番地 博多活版所

967
357

製本控 同第 號

書名 967 西 357 號

著者 尾多 港

受入者 年 月 日

備考 年 月 日

課 所 夫 吾

福岡縣纖維製品配給株式會社
 福岡縣石油配給株式會社
 福岡縣酒類販賣株式會社
 福岡縣醬油統制株式會社
 福岡縣味噌統制株式會社
 福岡縣木材株式會社福岡出張所
 福岡縣燐寸販賣株式會社
 福岡縣石炭販賣株式會社東部配給所
 福岡縣石炭販賣株式會社中部配給所
 日本木材株式會社福岡支店
 日本絹人絹織物配給統制會社福岡出張所
 日本出版株式會社九州支店
 博多織產地元賣株式會社
 西部燃料機共販株式會社
 九州硝子販賣統制株式會社
 日本原麻株式會社福岡支店
 日本食肉統制株式會社福岡出張所
 福岡縣食鳥配給株式會社
 日本蠶絲統制株式會社福岡出張所

上西町二八
 雁林町二七
 下土居町二四
 上小山町一九
 下西町明治屋ビル
 千歲町一丁目
 下東町三五
 吉塚三丁目
 新開一丁目
 片土居町十五ビル
 土居町三五
 渡邊通四丁目
 土居町
 上吳服町
 石堂町八
 下西町安田ビル
 藥院堀端產業會館
 西中洲松井ビル
 上吳服町片倉ビル

③ 三、九九八
 ② 四、七六二
 ③ 一、五六五
 ③ 三、六二〇
 ③ 二、七二二
 ③ 二、七七七
 ③ 三、五一七
 ③ 一、八一四
 ② 五、九三〇
 ③ 六、九七
 ③ 一、一二一
 ② 四、二三一
 ③ 一、一一一
 ③ 五、二九
 ③ 一、八八五
 ③ 五、七八四
 ② 五、七二〇
 ② 五、四二四
 ③ 五、七八一

967
E
357

終